様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：８４６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１６８４０

研究課題名（和文）日本中世における戦死者供養の実証的研究

研究課題名（英文）Fundamental study on the war dead memorial service in the Middle Ages of Japan

研究代表者
服部　光真（Hattori, Mitsumasa）

公益財団法人元興寺文化財研究所・研究部・研究員

研究者番号：００７４６４９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、中世地域社会史研究の立場から日本中世における戦死者供養の展開と特質を検討するものである。不特定多数を対象とする大規模供養の型式としての「三界万霊供養」に注目し、政治権力レベルだけではなく地域社会への展開過程を追究した。
　成果として、まず、諸事例の収集により「三界万霊」文言の歴史的成立と地域社会への導入過程、「三界万霊木牌」の成立・定着過程を明らかにした。また、「三界万霊木牌」の原物調査、関連史料の調査による各事例の具体的検討を進めた。そして戦国時代に地域社会で行われた三界万霊供養を中世民衆の思想的到達点と捉えられることを論じた。
　調査・研究の成果は報告書にまとめ、刊行した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to examine the development and characteristics of war dead memorial service in the Middle Ages from the standpoint of research on medieval community history. I focused on "Sangai-Banrei Kuyou" which is a type of large-scale memorial seravice for an indefinite number of dead, and pursued the process to which it was introduced to the community.
As a result, by collecting various cases, I clarified the historical establishment of the "Sangai-Banrei" wording and the process to which it was introduced to the community. In addition, we proceeded with concrete examination of each example by survey of original materials of "Sangai-Banrei Mokuhai (buddhist mortuary tablet for an indefinite number of dead)" . Finally, I concluded that it can be regarded "Sangai-Banrei Kuyou" held in the community during the Warring States Period as a thought point of the medieval people.
The results of the survey and research are summarized in the report and published.

研究分野：日本中世史

キーワード：三界万霊供養　三界万霊木牌　三界万霊碑　中世地域社会　三河国普門寺　遠江国本興寺　大和国円成寺　中世民衆思想

１．研究開始当初の背景

日本中世における戦死者供養のあり方については、近代とは異なる、敵味方を問わない戦死者供養が前近代には一般的であったことが井原今朝男氏によって改めて注目されるなど（国立歴史民俗博物館編『中世寺院の姿とくらし』〈山川出版社、2004 年〉ほか）、その政治史的意義、社会的意義については広く認識されてきた。

仏教行事による戦死者供養は、紀元前 3 世紀インドのアショカ王によるカリンガ王国征服後の造塔事業をはじめ、日本古代でも藤原仲麻呂の乱後の称徳天皇発願による百万塔陀羅尼の造立などがあり、日本中世に限られるものではない。しかし、日本中世においては、地域民衆を含めた社会全体の安穏要求を背景に、大規模な戦争に戦死者供養がしばしば随伴した点に特徴がある（久野修義「中世日本の寺院と戦争」〈歴史学研究会編『戦争と平和の中近世史』青木書店、2001 年〉ほか）。

したがって戦死者供養を取り上げることは、当該時期の政治権力や社会と仏教との関係性を考える上で重要である。その際、前近代のそれがしばしば近代国民国家による戦死者供養のあり方を相対化するものとして注目されている現状を踏まえれば、個別事例の分析深化と時代通観的な検討によって改めてその歴史的実態を明らかにし、中世社会固有の事情を踏まえて歴史的に位置づける必要があると考えられた。

２．研究の目的

(1)日本中世における戦死者供養については、政治権力の存立基盤としての社会と仏教の関係性を考える上で重要であることは認識され、特定の個別事例については研究があるが、中世を通じた諸事例の時代通観的な検討を踏まえて総合的に論じられてこなかった。また、関連する研究動向として、禅宗史・中世後期仏教史における施餓鬼会研究（西尾和美「室町中期京都における飢饉と民衆」〈『日本史研究』275、1985 年〉、原田正俊「五山禅林の仏事法会と中世社会」〈『禅学研究』77、1999 年〉、西山美香「五山禅林の施餓鬼会について―水陸会からの影響―」〈『駒澤大学禅研究所年報』17、2006 年〉ほか）、仏教民俗学・歴史民俗学による法界霊供養研究（伊藤唯真「〈法界〉霊の祭碑と民間宗教者」〈『聖仏教史の研究』下、法蔵館、1995 年、初出 1978 年〉ほか）などがあるが、相互に十分に参照されていない。そこで、中世社会における戦死者供養や、それを含む大規模共同供養を総合的に考察することが本研究の目的となる。

すなわち、①事例の網羅的収集、個別事例の具体的分析から、戦死者供養の諸形式を類型的に把握し、実態や背景、系譜を明らかにするともに、不特定多数の死者「三界万霊」を対象とする大規模供養の中で位置づけを明らかにすること。②敵味方を問わない供養がどの程度一般的であったのか、中世社会において本質的にどのような意味を持ったのかを明らかにすること、の２点が本研究の課題として大きく挙げられる。

(2)上記課題を検討していくにあたり、重視すべき史料として三界万霊供養の位牌である「三界万霊木牌」が挙げられる。「三界万霊」と記された石塔や木牌については、石塔では概ね室町、江戸時代以降のものが知られていたが、木牌となるとこれまであまり注目されてきたことはなかった。しかし本論で詳しく述べるように出土事例などもいくつか報告されており、また、伝世資料についても、三河国普門寺で暦応元年（1338）銘のものをはじめ、16 世紀以前に遡りうる遺存例がいくつか知られる。これらの「三界万霊木牌」は、各地域への三界万霊供養や施餓鬼の広がりを示す原物史料として重視されなければならない。出土例、伝世品を問わず他の事例を収集し、その史料的位置付けの検討、ひいては三界万霊木牌一般の史料的特質の検討をさらに深めることも具体的な研究目的である。

３．研究の方法

(1)三界万霊供養・戦死者供養の事例収集とそれによる時代通観的検討

中世の戦死者供養の展開を時代通観的に検討するために、まずは諸種の史料集や原物史料調査によって、その事例を収集した。

また、中世の戦死者供養は、飢饉の犠牲者の供養と合わせて、三界万霊供養に代表される大規模な共同供養として執り行われた。そのため、戦死者供養に限らず広く三界万霊供養の成立と展開を跡付けるため、三界万霊供養に関わる史料や遺物（木牌や石造物）についても、史料集や原物史料調査によって事例収集を行った。

(2)個別事例の具体的検討

16 世紀以前に遡りうる三界万霊木牌の遺存例として、三河国普門寺（愛知県豊橋市）、大和国円成寺（奈良県奈良市）、遠江国本興寺（静岡県湖西市）については、原物調査、関連史料調査などを行い、それぞれの三界万霊供養が執り行われた背景や、供養の実態を追究した。また、これに類する事例として、応永の飢饉による死者の供養に際して造立されたと考えられる（赤星直忠「鎌倉市海蔵寺の古位牌について」〈『横須賀考古学会年報』№17、1974 年〉ほか）海蔵寺（神奈川県鎌倉市）所蔵の大型位牌についても原物調査によって、その性格を検討した。

４．研究成果

(1)「三界万霊」文言の成立と歴史的展開

これまで歴史的に考察されず、「法界衆生」などの類似する表現と同一視されてきた「三

界万霊」の語が、いかに展開、定着していくかを検討し、日本中世の地域社会における不特定多数を対象とする大規模共同供養の歴史的変遷を明らかにした。

金石文では、「三界万霊」文言は 15 世紀以降に登場する。「三界万霊」の語は不特定多数の霊を表す語として「法界衆生」とほぼ同質化し、それと互換可能な語として広まり始める。石造物では、15 世紀末頃より一般化し、その当初から「三界万霊」が供養対象の主体をなすかたちであらわれ、念仏講や千部法華経講などの民衆的基盤をもって地域社会に広がっていた。「三界万霊」文言が中世後期に至って一般的に用いられるようになる歴史的な用語であったことには改めて注意を要する。

金石文を離れて、文献史料によって「三界万霊」という語の成立を確認すると、「法界衆生」とは異なり漢訳経典では確認できず、その他の仏書でもその用例の早いものは 13、14 世紀を遡らない。早い用例は、『仏光国師語録』、『幻住菴清規』(元代・延祐 4 年〈1317〉)など、鎌倉中・後期に日本にもたらされて大きな影響を持った禅宗寺院の清規や禅僧の語録などに求められる。当時の清規などによれば、禅宗寺院では日常的な廻向の対象として、「今上皇帝」とならんで「三界万霊」と記された位牌が建てられていた。

「三界万霊」と記された位牌という点で想起されるのは、施餓鬼の際に立てられる施餓鬼牌である。「三界万霊」文言の日本への導入自体、水陸会の影響を受けた施餓鬼や位牌などと軌を一にして、13 世紀の中国から禅僧、禅宗寺院を介している点は注目される。また、この時期は、怨親平等思想が禅宗を通して日本に定着した時期ともされている（山田雄司『怨霊とは何か』〈中央公論新社、2014 年〉ほか)。「三界万霊」文言の日本への導入と展開は、こうした 13、14 世紀における東アジア世界における仏教の動向や思想状況と密接に関連していたのである。戦乱や飢饉の後の大規模共同供養や日常的な無縁霊の供養の対象に「三界万霊」の語を用いるのが一般的となる過程には、供養の際に立てられた「三界万霊木牌」が重要な媒介となっていったと考えられる。

(2)「三界万霊木牌」の成立

日常的な廻向の対象として、あるいは施餓鬼会の位牌として造立された「三界万霊木牌」がいかに成立、定着していくかを考察した。

文献史料で三界万霊木牌の存在をうかがわせるのは、嘉暦 2 年（1327）『大鑑禅師小清規』である。同書で、毎日粥時の祝祷の対象が書上げられている中に毎月 29 日に「三界万霊十方至聖」とある。類似の文言が記された古位牌が美濃国永保寺に残されていたことが片野温氏によって報告されている（「美濃国古位牌の研究」〈『考古学評論第 3 輯仏教考古学論叢』東京考古学会、1941 年〉)。13、14 世紀頃の禅宗寺院では粥時の祝祷など日常的な廻向や年中行事の中で、その祝祷対象を記した位牌が使用されていた可能性が高い。三界万霊木牌もそのうちの一つとして成立したものと考えられる。

室町期には、明徳の乱などの大規模戦乱や飢饉後などに五山禅林による大施餓鬼が行われているが、その際「三界万霊」と記した位牌などが作られて供養されることもあった。但しこの段階ではその作法は必ずしも定着していない。長享 3 年（1459）『大施餓鬼集類分解』や永禄 9 年（1566）『諸回向清規式』に至ってようやく「三界万霊十方至聖」、「三界万霊六道四生七世父母六親眷属等」などの文言を記した位牌を建てることが記されており、禅宗の施餓鬼会での位牌として「三界万霊」と記した位牌（三界万霊牌）を立てることが定型化したのは室町後期のことのようである。

鎌倉後期には禅宗寺院における年中行事、または日常的な廻向の対象として立てられていた三界万霊木牌は、不特定多数の死者を表す語として五山禅林による大施餓鬼などでも一部取り入れられ、室町中後期には施餓鬼牌として一般的となり、近世には定型化していったものと考えられる。

(3)三界万霊木牌の原物調査研究

現存する中世に遡る三界万霊木牌の原物調査の報告とそれぞれの分析を行った。その詳細は、報告書『日本中世における戦死者供養の実証的研究』に収録した。

建武 5 年（1338）と戦国期の 2 度にわたって戦死者供養で木牌が用いられた三河国普門寺の事例、復興事業の総仕上げとして永正 10 年（1513）から 11 年に行われた一切経会で木牌が建てられた大和国円成寺の事例、16 世紀段階において地方有力法華宗寺院の施餓鬼会で木牌が用いられたことを示す遠江国本興寺の事例、応永の大飢饉を契機に大型位牌が造立された鎌倉海蔵寺の事例をとりあげ、それぞれ原物資料の翻刻、形態に関する報告と、その史料的性格、そして供養が行われた背景などを分析した。

また、原物調査は行っていないが、出土事例についても発掘調査報告書より管見に入った事例を集め、その史料的性格を形態、墨書などから分析した。

(4)戦国期普門寺における三界万霊供養の歴史的位置に関する研究

これまでの三界万霊供養に関する分析、および戦死者供養の諸事例の収集を踏まえ、戦国期の三河国普門寺における三界万霊供養の歴史的位置を検討し、総じて日本中世の地域社会にとっての三界万霊供養の意義を検討した。

日本中世における戦死者供養の諸事例を収集した「日本中世の戦死者供養年表稿」(報

告書『日本中世における戦死者供養の実証的研究』に収録）の分析によれば、中世後期には各地域レベルで戦死者供養が行われ、しかも禅宗に限らず、多様な形で展開している。これらを主導したのは基本的には地域権力であったものと思われる。地域の寺院や講で行われた供養もあり、これには多数の民衆の結縁が想定されるが、この場合、味方や一族などの有縁の霊の追善供養の意味合いが強い。

そのようななか、地域民衆を主体とする大規模共同戦死者供養の例として注目されるのが戦国期の三河国普門寺の例である。

永正 14 年（1517）頃に普門寺の後背で起きた船形山合戦を経て、天文 2 年（1533）に普門寺は兵火により焼失した。その再興の一環で三界万霊供養が行われたが、特定の地域有力者による単独事業ではなく、広範な地域住民を巻き込んだ地域的事業として行われた。それは、船形山合戦や地域の有力領主の対立関係、敵味方の区別をしない文字通りの三界万霊供養であり、一連の地域における戦乱の戦死者供養の意味を有していた。この背景には戦国期における村落の再形成に伴う地域社会形成の動向があり、戦乱による地域社会の分裂状況の克服という地域的な課題、安穏の希求という現実の生活実感があった。そしてこの必要水準に適合的な形式として、三界万霊供養という形式と、その本来的に有する怨親平等という普遍的救済観が新しい地域的規範として意志的に選び取られたものと考えられる。

すなわち、この三界万霊供養は、地域民衆が新しい地域的規範を模索する中で、彼らの生活実感に基づく願望や思想が、三界万霊供養の本来的に有する怨親平等という仏教思想の普遍的救済観に仮託されて表出したものと評価できる。ここに中世地域民衆の思想的な到達点を見出すことができよう。

(5)中世木札資料の研究

中世木札資料については、近年、史料学的な可能性が提示され、形態や機能面をも含めた研究の必要性が説かれている（田良島哲「中世木札文書研究の現状と課題」〈『木簡研究』25、2003 年〉、高橋一樹「金石文・木札からひらく地下文書論」〈春田直紀編『アジア遊学 209　中世地下文書論の世界』勉誠出版、2017 年〉ほか）。三界万霊木牌は、実際の法会の場で用いられた原物であり、その銘文は寺院史、地域史に関わる固有の情報を有している。これまで明確に位置づけられてこなかったが、三界万霊木牌もまた重要な中世木札資料の一種と捉えることができよう。

中世木札資料の中での三界万霊木牌の位置づけを探る中で、中世木札資料の遺存例の一つである大和国霊山寺所蔵の 14 世紀の寄進札の原物が約 40 年ぶりに確認された。この史料についてはこれまで本格的に史料紹介、内容分析がなされていなかったため、論文「鎌倉・室町期の大和霊山寺と鳥見荘」を執筆し、検討を行った。この寄進札は、霊山寺の寺僧集団が 14 世紀半ばに法会の整備を進めるために行った勧進に応じて、土豪・有力百姓層らが私領を寄進したことを示すものである。地域社会と中世寺院との関係性を示す重要な木札資料として本研究の主題と通底する資料と位置づけられる重要な成果を得ることができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
①服部光真、鎌倉・室町期の大和霊山寺と鳥見荘、元興寺文化財研究所研究報告、2017、2018、pp.81-94

②服部光真、霊山寺所蔵木札が語る富雄の中世、地域資料研究会だより、7、2018、pp.4-5

③服部光真、鷲津八幡神社所蔵の木札資料、湖西の文化、44、2016、pp.32-102

④服部光真、文献史料からみた元興寺極楽坊の納骨信仰、季刊考古学、134、2016、pp.38-42

⑤服部光真、中近世移行期における普門寺復興と三遠国境地域、地方史研究、377、2015、pp.18-22

〔学会発表〕（計５件）
①服部光真、14 世紀の大和霊山寺と地域社会、第 72 回「ムラの戸籍簿」研究会例会、2018

②服部光真、中世寺院の境内と村、第 66 回「ムラの戸籍簿」研究会例会、2016

③服部光真、『普門寺縁起』成立の歴史的背景とその影響、今昔の会、2016

④服部光真、三河国普門寺史料と研究の現段階、第 51 回「ムラの戸籍簿」研究会例会、2015

⑤服部光真、三界万霊木牌の史料的意義、奈良歴史研究会 5 月例会、ならまちセンター、2015

〔図書〕（計４件）
①服部光真、日本中世における戦死者供養の実証的研究、2018、63

②村田裕介・服部光真他、文化財の 仕事一筋 半世紀、宗教法人元興寺・公益財団法人元興寺文化財研究所、2017、36（うち担当執筆分は pp.6 -9）

③稲葉伸道編・服部光真他、中世寺社と国

家・地域・寺社、法蔵館、2017、538（うち担当執筆分は pp.199-227）

④佐藤亜聖・服部光真他、奈良県三郷町持聖院所蔵伝解脱上人貞慶五輪塔及び五輪塔地下出土蔵骨器調査報告書、持聖院・元興寺文化財研究所、2016、40（うち担当執筆分は pp.19-28）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）
○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
服部　光真（HATTORI Mitsumasa）
公益財団法人元興寺文化財研究所・研究部・研究員
研究者番号：00746498

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
なし